

「米沢の医師たち」 展示資料解説

※実際の展示順とは必ずしも一致しません

※一部、実際には展示されていない資料があります

米沢の医師と鷹山

江戸時代中頃、財政の悪化に加えて度重なる飢饉に見舞われるなど、米沢藩は危機的な状況にありました。難しい藩のかじ取りを担う立場にあった治憲（のちの鷹山）を、米沢の医師たちは陰に陽に支え続けたことが今に伝わる資料からうかがえます。

寛政4年（1792）、米沢に招かれた江戸の本草家・佐藤平三郎は薬草の栽培や製薬法を医師たちに教えました。これがきっかけとなり、翌年には医学校・好生堂が創設されました。また、現在の公費留学制度にあたる「江戸勤学」の制度も整備され、医学生の勤学が盛んになっていきました。

米府鹿子（当館蔵林泉文庫 51）

米沢藩士・原田直久によって米沢の自然・歴史・名勝などをまとめた風土記的、地誌的な著作。成立は宝暦年間（1751～1764）といわれる。第4巻のうちに「医師」13名、「外科」7名、「針医」5名、「町医」5名の姓名が収められている。

飯粮集（当館蔵林泉文庫 610）

天明3年（1783）、藩医14名の連名で藩へ提出された上申書の写。宝暦5年（1755）、一関藩の医師・建部清庵が救荒植物をまとめて記し、後年に刊行された「民間備荒録」にもれ落ちた植物のうち、過去に米沢藩領内で用いられたことのあるものを掲載した、とあと書きに記す。植物ごとに味・寒温の性質・毒性を付し、食べ方を記述する。本書がまとめられた天明3年は東北一円で大飢饉となり、米沢藩内でも作柄が悪く、尾張藩から飯米を借用するほどであった。そのような情勢において、藩医たちの知見が求められたのだろう。本書の成果は後に頒布される「かてももの」に生かされたと評価する向きもある。

菁莪館遺稿（当館蔵薬科家文書 30）

藩医・薬科松白の漢詩遺稿集。細井平洲による明和8年（1771）の序文と、神保蘭室による寛政2年（1790）の序文の二つが収載されていることから、寛成年間以降の成立と考えられる。二巻にわたり多くの漢詩文を収めている。

標題にある菁莪館は松白が設けた私塾の名でもある。塾生だった竹俣当綱や荏戸善政らは後に藩政の要職に就き改革を推進した。

また、松白は細井平洲を治憲（鷹山）の師として推薦したことでも知られる。米沢の藩政史において医師・松白がもたらした影響は大きいものだったといえる。

孝経（当館蔵林泉文庫 250）

米沢藩の医学校・好生堂から享和2年（1802）に刊行された。孝経は孔子の教えを門人たちがまとめたものとされる。好生堂は寛成5年（1793）創設。薬草園が併設され、医学書やオランダ製の外科器械類が設えられていたというが、儒教教育も取り入れられていたことがうかがえる。

本書の欄外には渋井太室による註が付されている。渋井は佐倉藩の儒者。細井平洲と親交があったことで治憲（鷹山）の師を務めるようになった人物としても知られる。

堀内素堂 ～日本初の小児医学書を作った米沢藩医～

藩医・堀内家出身の素堂は江戸での勤学で蘭学と医学を修め、文政5年（1822）に帰国すると藩主・斉定の御側医を任されました。この頃の好生堂は漢方医が運営の主流を占めていましたが、ある時病床にあった斉定が蘭方医・湊長安の処方した薬で劇的に回復したことがきっかけとなり、米沢では蘭方医に対する見方が徐々に好転していったといわれています。素堂の開いた塾には各地から多くの入門者が来ました。

弘化2年（1845）ころ、ドイツ人フーフランドが著した医学書のオランダ語訳本を素堂が漢文調に訳した『幼幼精義』が出版されました。これは日本初の小児科の医学書として、その後の日本の医学に多大な影響を与えました。

幼幼精義（当館蔵地域史料 311）

ドイツ人フーフランドが著した医学書のオランダ語訳本を日本語に重訳したもの。訳者は米沢藩の医師・堀内忠寛（素堂）。日本初の西洋小児医学書とされる。全7巻14章構成で、初輯は小児の原病総論と薬剤論、二輯は天然痘とその治療記録などから構成されている。初輯は天保14年（1843）には版が出来上がったが、実際には弘化2年（1845）以降に刊行された。また、二輯は弘化2年に幕府から開刻の許可が出されたが、実際の刊行は嘉永元年（1848）以降となった。これは、幕府による度重なる和訳洋書の出版への弾圧が一因であると考えられる。そのためもあってか、二輯の奥付で予告されている三輯の刊行は実現されることはなかった。

医学史の研究論文の中には、子どもの「発達」という概念が日本語に訳され導入された最初期の文献であるとして本書を評価するものもある（田中昌人「蘭学における発達の概念の導入について：堀内寛『幼幼精義』（1843・天保14年開雕）まで」『京都大学教育学部紀要 39』1993年）。

(参考)『幼幼精義』翻刻と訓註 (当館蔵 K490.7/コ)

米沢女子短期大学で行われている「幼幼精義」の共同研究の報告書。翻刻文と読み下し文を載せ、適宜用語解説を付す。この研究会は7巻全部の翻刻と訓読を目標として平成26年(2014)から始まり、これまで4冊の報告書が刊行されている。

医家必携 (当館蔵地域史料 312)

堀内素堂の子・忠亮の著。西洋の薬物について、それぞれの薬効や用法・用量などを記す。安政4年(1857)刊、全3巻から成る。3巻の奥付には「幼幼精義」の第三輯の出版を予告する文言が記されている。同書の訳者である堀内忠寛は既に安政元年に亡くなっていた。実現は叶わなかったが、「幼幼精義」三輯の出版を目指した父の願いを子の忠亮が引き継いでいたことがうかがえる。

近玄庵 ～高レベルな語学力を持った町医～

花沢屋の屋号で薬屋を営んでいた近家に生まれた玄庵は、医学を志して長崎・大坂に遊学し、大坂では緒方洪庵の適塾に入塾しました。適塾時代に使ったと思われるオランダ語の教科書や辞書、ノートが近家に伝わり、今では当館に収蔵されています。資料からは、オランダ語で書かれた本や論文を読み解くことができた玄庵の能力の高さをうかがい知ることが出来ます。惜しくも玄庵は安政3年(1856)に33歳で短い生涯を終えました。

玄庵の所有だったと考えられる『泰西内科集成』は、木の活字を組んで、米沢で発行された、西洋医学書を訳したものです。幕末の米沢には西洋医学を受け入れる素地があったことがこの資料からもうかがえます。後世の人が江戸時代の米沢を「東北の長崎」と評したのもうなずけます。

幼幼精義 (当館蔵近家文書 46)

近玄庵が所有していたと考えられる。前出の同本は私家版と考えられているが、近家所蔵のこちらは版元の青藜閣の出版書目が巻末に含まれており、後に増版された本とわかる。また、米沢女子短大所蔵の同本とも若干体裁が異なっていることから、少なくとも3度版を重ねたことがわかる。堀内素堂著の幼幼精義が広く世間に求められていたことがわかる資料ともいえるだろう。

緒方富雄編著『緒方洪庵適々斎塾姓名録』 (当館蔵 K490/O)

緒方洪庵が大坂に開いた蘭学塾・適々斎塾(適塾とも)の塾生の名簿を、昭和42年(1967)に複製・刊行したもの。米沢出身の人物が複数名記されているが、そのうちに花沢(近)玄庵の名もみえる。ここには、玄庵が嘉永元年(1848)4月29日に入塾したと記される。

何年ほど在籍していたのかは定かではないが、北條元一の『米沢藩医史私撰』では二年程度在籍していたものと推測している。玄庵の蘭学に関する知識や技能は適塾在籍時に磨かれたものと考えて相違ないだろう。

蘭学逡 （当館蔵近家文書 20）

藤林淳道の著。後書きに文化7年（1810）とあることから、これからそう遠くない時期に刊行されたものと考えられる。藤林の師・稲村三伯らによって編纂された日本初の蘭和辞典『ハルマ和解』を要約し、要語を補って藤林が編集した『訳鍵』の凡例付録が独立して刊行されたものが本書。オランダ語学習の入門編として作成されたものと考えられる。

医範提綱 （当館蔵近家文書 26）

文化2年（1805）刊、宇田川榛斎著。オランダの解剖書を翻案した同人著『遠西医範』を抄録したもの。人体構造とその機能を解説し、本邦初の生理学の教科書とも評される。宇田川榛斎（玄真とも）は複数の医学書・化学書を著し、「蘭学中期の大立者」とも称されている。「臍臓」や「腎盂」など、現在使われている人体に関する用語の多くは本書から生まれたものである。

遠西医方名物考 （当館蔵近家文書 27）

文政5年（1822）刊、宇田川榛斎訳。西洋の薬物の名前や製法、用法などがまとめられている。全36巻のうち、近家には第五巻のみ伝来した。

和蘭文典前編 （当館蔵近家文書 23）

天保13年（1842）刊。オランダで刊行されたオランダ語文法の教科書を、日本で再刻し刊行したもの。福沢諭吉の『福翁自伝』によると、適塾ではこの本をオランダ語学習の初心者の教科書として用いたとする。それ故、本資料は近玄庵が適塾在籍時に使用したものとみられる。玄庵はこの本でオランダ語のスキルを磨いたのだろう。近家には同じ本が二点伝わったが、うち一冊は使用痕が薄く、適塾を離れた後に求めたものとも考えられる。

和蘭文典後編 （当館蔵近家 24）

嘉永元年（1848）刊行の和蘭文典の後編。前編同様、オランダ語の筆記体を木版刷りで著している。適塾では前編・後編をそれぞれ半年間で学習したといわれる。こちらもまた、玄庵がオランダ語学習に用いた本とみて相違ないだろう。

和蘭文典訳語筈初編 （当館蔵近家文書 22）

安政3年（1856）刊。第二巻が近家に伝来した。『和蘭文典前編』第二部の25から74章までのオランダ語の読み方を片仮名で記し、単語ごとの訳を付す。玄庵は本書刊行の翌年、33歳で没した。そのためか、本書は使用痕が希薄である。

蘭仏蘭辞書 （当館蔵近家文書 21）

フランス人ピエール・マーリンによる蘭仏・仏蘭の辞書。マーリンの著作は早くから輸入され、オランダ通史や蘭学者たちに重用されたという。玄庵所用と考えられる近家旧蔵の本資料は1793

年刊行の第6版。同じ第6版は日本国内では、武雄市図書館・歴史資料館所蔵の重要文化財「武雄の蘭書」内に伝来している。

依人身究理礼 （当館蔵近家文書7）

和本綴の一冊。題箋は無く、小口に記された文言を資料名にしている。中は筆記体のオランダ語のみが記されている。玄庵が筆写したと思われる文字は非常に流麗。何らかの医学書の第6節からが書写されている。

『人身究理』という邦題で江戸時代に刊行されたオランダ語を和訳した医学書としては、ボードウィン著のものや、リセランド著（エルペキウム訳）のものなどが知られるが、本書に記された内容はその何れにも当てはまらないように見受けられる。

玄庵が有したオランダ語の読解力と医学の知識についてうかがい知ることが出来る資料といえる。

（近玄庵のノート） （当館蔵近家文書12-2）

玄庵が書写したものと考えられるオランダ語で記されたノート。複数の医学関係の書籍や論文などが書写されているようである。中にはドイツの外科医・ケリウスの論文をオランダ訳したものと思われる一文などが記されている。資料からは、オランダ語の医学書を原文のまま読んでいた玄庵の姿が想像される。

昆斯 （当館蔵近家文書12-1）

こちらも玄庵が書写したと思われるオランダ語のノート。表紙にある「昆斯」はドイツ人医師・コンスブルック（昆斯浦律掘）を指すものと考えられる。ノートの内容は、コンスブルックの医学書をオランダ語訳した『Geneeskundig handboek voor praktische artsen』の序文を書写したものとわかる。この本を、鶴岡出身の蘭学者・小関三英が和訳したものが幕末に『泰西内科集成』の名で刊行された。

泰西内科集成 （当館蔵近家文書39）

前出のドイツ人医師・コンスブルックの医学書のオランダ語訳本を日本語に訳したもの。訳者の小関三英は鶴岡の出身。江戸で医学や蘭学を学び、幕府天文方の翻訳掛を務めた人物として知られる。小関は天保10年（1839）、幕府による蘭学者たちへの弾圧（蛮社の獄）が起ると、自身へも取り調べが及ぶことを恐れ自害した。

本資料は小関の死後に刊行されたものとされる。見返しの文言から、米沢の「古松庵」によって活版印刷されたものとわかる。木の活字を組んで印刷されているが、その品質は決して優れたものとは言い難い。観察すると、漢字の活字は粗製の差が大きいことから、複数の出所から集めた活字を再利用したものと想像される。また、片仮名の活字の多くは素人作と思われる程質が低い。これらのことから、本書の印刷元である「古松庵」は、当時の主流であった木版印刷のノウハウを持た

ないものの、何とかして医学書の出版を目指した人物であった可能性が想起される。幕末の米沢藩医に桑島松庵という人がおり、この人物が「古松庵」と称した可能性もあるが、現時点では定かではない。

本資料で特に注目すべき点として、欄外に玄庵のものと思われる筆で、原本と訳本との差異を指摘している箇所が複数存在している。中には訳文を朱筆で大幅に修正した箇所も見受けられる。このことから、玄庵はオランダ語の原本を相当に高い水準で読解していたことがうかがえる。当時の米沢藩内の蘭学医の水準をうかがい知る上でも重要な点だといえる。

(参考) 泰西内科集成 (京都大学附属図書館蔵)

(出典: 国書データベース <https://doi.org/10.20730/100268978>)

京都大学附属図書館富士川文庫に所蔵されている『泰西内科集成』。米沢・古松庵の印刷による。一見すると当館蔵のものと同じに思えるが、見比べると使用されている活字が全て異なっている。つまり、『泰西内科集成』は活字を組み直して重版されたことがわかる。同書に対して多くの需要があったことがうかがえる。

(参考) コレラ病論 (神戸大学附属図書館蔵)

(出典: 国書データベース <https://doi.org/10.20730/100260402>)

見返しに「古松庵活版」とある点や、特徴的な活字の様子から、『泰西内科集成』と同様に米沢の古松庵の発行とみて相違無いと思われる。京都の蘭方医・新宮涼庭らの著。コレラの症状や対処法を記す。

本書は安政5年(1858)10月の発行。この一月前に寧寿堂から出版された同名の書と本文内容は一致するが、古松庵版の巻末には寧寿堂版には無い「寧寿堂主人口授」による「コレラ病用薬度量略記」が付されている。ここから、古松庵版は無許可の複製本では無いこと、寧寿堂を称した医学者と米沢の古松庵との間に交流があったことがうかがえる。

安政5年当時、日本国内でコレラが大流行していた。その状況にあって、米沢の古松庵では寧寿堂と連絡し、急ぎ本書を出版したのと考えることが出来る。

水野道益 ～米沢藩医の情報網と探求心～

水野家は「米府鹿子」に紹介されている医師の筆頭にも出ている家です。ここでは、幕末から近代にかけて活躍した水野道益が残した記録を中心に展示しています。

御側医として江戸の桜田邸に詰めていた道益は、蘭方医をはじめとした江戸の知識層たちと情報共有のネットワークを築いていた様子が資料からはうかがえます。道益が特に関心を寄せていたのは、交易を求めて日本を訪れるようになった欧米諸国と徳川幕府との外交交渉に関する情報でした。極秘とされていた情報も迅速かつ正確に、道益は手に入れていたことがわかります。

(幕府老中・阿部正弘の和歌) (当館蔵水野家文書 79)

異国船出沒にまつわる嘉永元年(1848)以降の書状などを書写した綴りのうちに、当時幕府老中の席にあった阿部正弘が詠んだとする和歌三首が記されている。

標題は「この頃浦賀下田辺へ異国の船多く見へしよしを聞く」とする。歌は次のとおり。

「まことなき 忽みしのふねも うらやすの はやきおきてに うちかへさなん」

「ますら男の たけき心の と、きなむ ふた、ひとてハ 舟ハよせまし」

「寝てハさめ さめてハなけく 異国の ことウき舟の よるへいかにと」

本資料上に、これは前田夏蔭によって添削された和歌を書写したと記されている。前田夏蔭は清水浜臣(江戸の医師・歌人)の門人で和歌に長けたといわれる。嘉永7年幕府に出仕し、「蝦夷志料」の編修にたずさわった。

文末に「嘉永二年七月晦日写之于記室/秀発」とある。この秀発は米沢藩士・山田民弥秀発を指すものと考えられる。秀発は水野道益の次男で、天保12年馬廻組山田八郎左衛門の名跡を継いだ。嘉永2年当時の役職は不明だが、嘉永5年には御記録方、安政3年には新田藩主・勝道の御小姓、同7年には新田藩御留守居を勤めており、優秀な人物であったと想像される。秀発がこの和歌を「記室」において写した旨が記されているが、記室は藩の御記録所を指す可能性が考えられる。

情報の出所や経緯等が明示されている点から、阿部の作とするこれらの三首を市井の創作と切り捨てるのは早計に思われるが、その真偽は兎も角、水野の情報収集網の一端をうかがえる貴重な資料といえるだろう。

(嘉永5年 オランダ商館からの密告) (当館蔵水野家文書 80)

嘉永6年(1853)のペリー来航に関する諸情報を記した綴りのうちに、前年の嘉永5年にオランダ商館長から幕府に対して内密に伝えられたペリー来航の予告が含まれている。日本の漂流民を護送しつつ、開港や石炭の供給を求めていること、アメリカの指揮官は「アウリニット」に代って「ヘルリイ(ペリー)」などが記されており、その後の事実経過を踏まえた時、記載の情報は相当に正確なものであることがわかる。

文末には「右御覧後御火中」とあることから、この文章は内密にやり取りされた手紙を書写したものであることがわかる。幕府に近い人物と水野の間に情報交換のためのネットワークが形成されていたことがうかがえる。

ペリー来航の予告は水野の許にいつ頃伝わったのだろうか。本資料の標題は「去子年蘭人告密抜書」とあるため、ペリー来航の年にあたる嘉永6年のうちには、水野はペリー来航の可能性を知っていたものと考えられる。従来、ペリー来航の予告は幕府中枢の間でしか共有されなかった極秘情報であったと考えられてきたが、水野のような一部の民衆の間では秘かに知られるところであったのかもしれない。

（嘉永7年 アメリカ通詞ホルトメンとの密談） （当館蔵水野家文書 82）

嘉永6年（1853）のオランダ風説書などを記した綴りのうちに、同7年8月、日本に滞在中のアメリカ人通詞（通訳）のホルメトン（アントン・ポートマン）と幕府の通詞・堀達之助らによる密談の内容が記されている。

類似の資料は北大図書館蔵「力石雑記」や名古屋市蓬左文庫蔵「青窓紀聞」などにもみられることから、幕末当時においても一定の人々には知られるところであったことがわかる。

（山脇正準「浦賀日記」） （当館蔵水野家文書 84）

郡上藩士・山脇正準の著。安政3年（1856）8月24日から28日までの出来事を日記形式で記す。越後流軍学の師範でもあった山脇は、幕臣・一柳播磨守の求めにより幕府の西洋式軍艦の操練訓練に参加した。ロシアの帆船を模した二隻の伝習船は築地の講武場を発ち、羽田を過ぎようとした頃から暴風雨となるも24日のうちに辛くも浦賀港へ着眼した。翌25日になると風雨は増し、夜になると更に烈しくなった。訓練のためとして碇泊する船内から出ることを禁じられていた乗組員らは、今にも破船しそうな状況の中、右へ左へ走り回った。山脇の日記はその際の状況が子細に記されている。結果的に船は転覆せず一部損傷に留まり、数名の負傷者を出して済んだようだ。山脇は日記の最後で、西洋式の艦船についての知識が未熟な船員たちを乗せて出帆したことは愚かであったと悔いて、後の人の教訓となることを望んでいる。

この台風は「安政江戸台風」とも呼ばれ、南関東の沿岸を中心に約十万人の死者を出したもされる。

水野道益旧蔵の「浦賀日記」と同内容の本は、仙台藩主伊達家にも所蔵されていたことが知られる（現在は東京海洋大学附属図書館収蔵）。本館所蔵資料には「浦賀日記」に続いて、同じく山脇正準が著した、戦場での号令に関する論考「言葉之令弁」が収められているが、これは管見の限りでは他所での所蔵が確認できなかった。

(安政三年七月下田へ米人渡来之応接一条) (当館蔵水野家文書 93)

安政3年(1856)7月、米国総領事として来訪したタウンゼント・ハリスと幕府役人との会談内容と事の経緯を記す。記されている内容は具体的かつ詳細である。記録は8月6日付で終わっている。この前日の5日、ハリスは下田の玉泉寺に入り領事館を開いた。

文末に朱字で「丙辰八月念写原本柴田収蔵本」と記す。ここにある「念」は20日を指す。すなわち、8月6日までの記録が二週間ほどのうちに水野の書写するところとなったことがうかがえる。

この記録の原本の持主としてあげられている柴田収蔵は佐渡出身の人物で、江戸で蘭方医学を学んだ。嘉永5年(1852)に卵形式の世界地図「新訂坤与略全図」を作成し、安政元年(1854)には「蝦夷接壤図」を作成した人物として知られる。安政2年には絵図調出役として幕府に出仕していることから、ハリスとの交渉記録を比較的容易に入手できる立場にあったものと考えられる。東洋文庫608『柴田収蔵日記2』収載の安政3年の日記には柴田が「下田応接書取」や「和蘭風説書」を人に貸し渡している記録が散見される。水野も柴田から直接情報を入手したのだろうか。

水野が収集した情報の速度や情報源を考える上で重要な資料の一つといえるだろう。

(堀田正睦の口達写) (当館蔵水野家文書 39)

安政4年(1857)7月2日、幕府老中・堀田正睦から箱館奉行ら幕臣に伝えられた達しの写。アメリカへ出府する方針が決まったので確認事項があれば各々申し出るように、とする。

これは当時アメリカと交渉中にあった日米修好通商条約の批准に際し、幕府使節をアメリカに派遣しようとする中で作成された文書である。条約の締結は安政5年、実際に使節が派遣されたのは万延元年(1860)のことであったが、安政4年の段階で幕府中枢では使節の派遣が決まっていたことがうかがえる。

本資料で特筆すべきは、末尾に「七月六日写」と記されている点である。アメリカへの使節派遣を報せる老中の口達が四日のうちに書写され、水野のもとに伝えられたことがわかる。水野は、重要な外交政策に関する情報も即座に入手できる環境にあったことがうかがえる。

覚 (当館蔵水野家文書 29)

水野道益の日記より。嘉永4年(1851)、水野から藩の御側医たちへ宛てたとみられる願書の控え。経済力を持っていた百姓らが、天保の飢饉の際に薬や金品を提供したことで町医を名乗ることを許されたが、水野はこれを、「偽医」が氾濫していると問題視している。水野はこの問題を解決するためには藩の医学校・好生堂において役人立会の上で医業の試験を実施すべきである、と訴える。

この文書に続く一文からは、試験実施を訴える願いに対して藩からは何等の沙汰も無かったものの、百姓が医業を名乗ることは禁止されるようになったことがうかがえる。江戸時代において、身分の上昇を志向する人々のうちには医師の身分を得ようとする傾向があったことは他藩の史料でも

確認できるところである。医学館の開設や、医学生の方費留学制度がおこなわれていた米沢藩においてはその傾向はより顕著であったのかもしれない。

(写真) (安政5年 コレラ流行の記録) (当館蔵水野家文書 29)

安政5年(1858)8月9日条に「江戸一般霍乱の如き症にて…死する症流行」と記されている。この時、江戸ではコレラが流行し始め、米沢藩の江戸屋敷でも多くの人びとが感染したと記されている。8月15日条で「コロリ」の名を出すまで、水野はこの病を「流行病」と称している。

水野は当時、12代藩主斉定の妻・昌寿院の側医を務めていたことが資料からわかるが、8月20日頃から昌寿院もコレラに感染し深刻な容態に陥ったことが記されている。コレラの治療に定評のあった仙台藩医・石川桜所や広島藩の医師に応援を求めて治療にあたったことが日記からはわかる。治療法も確立されていない中、ホフマンと呼ばれる鎮痛剤や礞砂(塩化アンモニウム)などが処方された。治療の甲斐もあつてか、昌寿院は22日には快方に向かった。しかし、8月の間に藩の江戸屋敷では四十名を超える死者が出たことも記されている。

(写真) (嘉永5年オランダ風説書より) (当館蔵水野家文書 80)

安政5年(1858)のコレラ大流行の以前、嘉永5年(1852)のオランダ風説書の写の中に、ヨーロッパで「コレテ」という疾病が流行し多くの人命が失われたと記されている。「コレテ」はコレラの文字が写し伝わっていく間に書き誤ったものと思われる。欄外に、柴川道人によると「コレテ」は霍乱一種であるという、とも記されている。水野は大流行の以前からコレラの存在を知っていたことがわかる。しかし、前出の日記の内容からは、流行の当初はこの病がコレラであることまでは気付かなかったこともわかる。

もの申す医師 もの記す医師

米沢の医師たちは医学をはじめ、幅広い分野に関心を広げ、自身の言葉で発表し続けました。藁科立遠は、藩政を鋭くかつ激しく批判した『管見談』を著し藩へ提出しました。「他見無用」と記された写本が複数点伝わっていることから、多くの人の間を秘かに広まったものと思われれます。一方で、米沢のあれこれの話題をまとめた『井蛙鄙談』と題した本も立遠は記しています。

また、ここでは他の医師たちの著作も展示しています。文学や歴史、社会など、江戸時代の米沢の医師たちが幅広い分野に探求心を広げていた姿がうかがえます。

管見談 (当館蔵地域史料 217)

藁科立遠著。財政再建が求められている藩の改革に対する意見が求められた時に提出された文章の写。本文中に「去年の御令条に諸士の妻子は櫛笄無用と仰せ出され」とあり、寛成元年に同様の達しが出されていることから、本書の作は寛政2年(1790)で相違無いだろう。「公儀」「士人」

「農人」「町人」の全四章構成で、藩の施策や人々の生活様式の変化、藩政機構のあり方にまで及ぶ程広範にわたって鋭い批判が展開されている。特に「公儀」の章の内では、為政者によるワンマン政治の弊害を明確に指摘しており、立遠が相当の覚悟を以て執筆したことがうかがえる。これは、新藩主・治憲（鷹山）のもとに行われていた改革に対し批判する訴状を出した重臣らが粛清された「七家騒動」と称される事件の首謀者と目された立遠の養父・藁科立沢が処刑され、立遠自身も長きにわたって困入を強いられたことと無関係では無いだろう。本書が藩へ提出された後、立遠は再登用され、藩医たちが所属する外様法体の末席に列せられた。本書は写本が複数伝来しているが、その多くには巻末に他見無用の旨が記されている。

余談になるが、昭和35年（1960）発行の『山形県史資料編四』に翻刻文が掲載されているが、使用した底本のせいか、当館蔵のものと比較した際多くの内容が欠落している。

鶴城四時歌（当館蔵 地域史料 402）

立遠の養父・藁科立沢の編による漢詩集。成立は明和7年（1770）。米沢藩士らが詠んだ四季の漢詩64首をまとめる。序文は治憲（鷹山）の師・細井平洲による。藩士らによる文化サークルの集団の主要人物としての立沢の立ち位置が想像される資料といえる。

立沢は藩主・重定の御側医や藩の儒者職を務めたが、本資料が成立した明和7年には儒者職を解かれた。その後、安永2年（1773）に前出の「七家騒動」を煽動した罪で処刑された。

井蛙鄙談（当館蔵林泉文庫 702）

前出「管見談」と同じく藁科立遠の著。重定・治憲時代の藩内の雑多な話題を書き記したもの。その多くは藩士の武芸や力量に関するものだが、中には怪談物や「城西猫明神の由来の事」など民話を採集したものも含まれている。立遠が幅広い分野に興味関心をいただいていた様子が伺える資料といえる。

当館蔵の筆写本は伊佐早謙収集資料「林泉文庫」に含まれ、三冊（全五巻）から成る。各誌のはじめに「鮎川蔵書」「高山」印が捺されている。同書は書写され置賜地域を中心に伝播していたものと推測される。

旅のすさび（当館蔵米沢善本 207）

享和2年（1802）、飯田忠林著。題箋には「多毘能斯薩比（たびのすさび）」とあるが、横には朱字で「駿河紀行」とも記されている。飯田は当時、新田藩主・上杉勝定に伴い上京中で、さらに駿府加番を命じられた勝定に従い駿河に赴いた。本書はその際の紀行文。仮名交じりの文字で日記形式に記す。

飯田はこの後、文化3年（1806）、興讓館内に移った藩の医学校・好生堂の初代総裁に任じられた。

花かつみ （当館蔵地域史料 70）

文政4年（1821）、藩医・内村玄賀の筆。米沢を中心とした故実や儀礼、出来事などを書き記す。全体の構成を俯瞰すると、思いつくままに筆を進めたように見受けられる。本館には同様の筆致で同様の装丁が施された本が二組収蔵されている。多くの人びとの閲覧に供するために著者の玄賀が複数の本を作成したものと考えられる。

松島日記 （当館蔵林泉文庫 269）

文政7年（1824）、矢尾板梅雪による旅行記。治憲・治広の御側医を務めていた矢尾板は、名勝の松島に行ってみたいと思っていたが職務の関係もあってか叶わずに五十路に近づいていた。治広の逝去により御側医の勤めを離れて暇が出来たので、念願の松島旅行へ向かった矢尾板は三週間程の旅の様子を、時々の和歌とともに日記に綴った。

本書は前出「旅のすさび」同様、仮名交じりで記されており、読むには少々骨が折れる。斎藤武氏が『置賜文化 108号』に翻刻文を掲載されているので、興味を持たれた方にはまずはこちらをご覧いただくことをお勧めしたい。

（文責：市立米沢図書館 宮澤崇士）